

平成26年度第1回スポーツ推進審議会 議事録

- 1 日時：平成26年5月13日(火) 13:00から14:30
- 2 会場：柳川庁舎 1階 会議室
- 3 出席者：岡村 良久、奥 静子、笠島 明、柴田 達夫、奈良 輝昭、
本多 信雄、増田 あけみ、三浦 憲二、村上 清男、和嶋 裕人(10名)
事務局：教育長 月永 良彦、教育部長 福井 正樹、理事 成田 聖明、
参事 加藤 文男、主幹 今村 剛志、主事 高橋 秀太(6名)

4 概要：

(1) 委嘱状交付式

開会

委嘱状交付

教育長あいさつ 青森市教育委員会教育長 月永 良彦

閉会

(2) 平成26年度第1回スポーツ推進審議会

開会

委員紹介

事務局紹介

審議会の概要について事務局から説明

組織会

会長及び副会長選出

奥静子委員より会長には、増田あけみ委員の推挙があり、各委員及び本人が了承し会長が決定

【会長あいさつ】

和嶋裕人委員より副会長には、笠島明委員の推挙があり、各委員及び本人が了承し副会長が決定

【副会長あいさつ】

- ・ 会長：増田 あけみ
- ・ 副会長：笠島 明

報告事項

1 青森市スポーツ推進計画及び事業概要について

スポーツ推進計画の概要について事務局から説明

事業概要について事務局から説明

各委員から自己紹介と意見、質問があった。

【岡村委員】

平成25年度は、スポーツ医科学講座を実施し、小中学校の現場の指導者と接することができて大変有意義であった。今後はスポーツ薬学講座、スポーツ歯科学講座、スポーツトレーナーの講座等様々な講座もあるので検討いただければと思う。カーリングにも関わっていたが、チーム青森が解散して残念であったが、チーム青森の選手から、カーリングを始める子ども達が増えてきているので、次に繋がるのではという意見もあった。今後青森の子ども達でチーム青森ができればいいと思う。

【奥委員】

スポーツ推進委員の活動をしている。スポーツ基本法の改正に

より、体育指導員からスポーツ推進委員に名称が変わり、役割も実技指導から指導者と競技者の仲立ちをするものに内容が変わってきている。まだまだ、スポーツ推進委員を理解している方が少ないが、青森市の広報などに広くアピールしていただいていることで、何とか軌道に乗りつつある。これからも広報活動を続けて欲しい。

スポーツ推進委員の活動は、種目団体それぞれでは頻繁に行われているが、一般市民からの要望への対応はまだ少ない状況なので、今後も認知度を向上させることが必要だと考える。また、市民への活動が少ないが高齢者への活動・レクリエーションはたくさん実施している。

町内会の携わりが少なく感じているので、老人世帯を外に引っ張り出すためにもスポーツ推進委員を活用して欲しい。活躍の場を広げて欲しい。

【笠島委員】

大学でスポーツを行っている学生は 選手として全国を目指す人と スポーツを楽しみたいという人と2分化している。

小中学生に学生が指導するということもあるが、大学は試合の期間が長いので、小中学生にスポーツを指導するには、難しい部分もある。

本学（青森大学）と青森市は、連携協定を結んでおり、また、昨今他の大学でも大学の資源（学生や教職員などの人材及び学校施設）を地域に還元する動きがあるように本学でも取り組んでいきたいと考えている。

弘前大学などでは、サークル活動として、高校生に対し、学生が進路指導を行う取り組みが行われているし、そのような活動を通じ単位化に取り組んでいる大学もある。

本学でも、スポーツボランティアの活動を通じ、地域の中で実践的にやっていけたらと考えており、また、学内で単位化できないか検討する動きもある。

【柴田委員】

運動に対する小学生の実態は、「苦手だ」「疲れるのでいやだ」と感じている小学生が増えている。なかでも女子児童については、「する」「しない」の2極化が極端である。

生涯にわたって運動やスポーツに親しむには、小さい頃からの取り組みが大事であり、運動に親しむ子ども達を育てたいということで、小学校教育研究会体育部会では体育学習等の研修会を実施している。

運動の部活動については、本学（沖館小学校）は児童が714名と大規模校であるが、現在野球部を希望する子が少なく、サッカー部は、70数名と偏っている状況である。

部活動を指導する先生に関していうと、小学生の先生は、担当する指導する先生に関していうと、小学校の先生は担当する部活動を専門的にやってきた教員ということではない。また、小学校は女性の先生が多いが、部活動を指導するのは、男性の先生がほとんどであるため、なかなかその体制が難しい。

【奈良委員】

青森市スポーツ推進計画は、「学校活動の充実」と「ウインタースポーツの推進」が別項目となっているが、スポーツの推進は、学校活動と地域活動と連携の中で子どもを育てた方がよいと考える。これは、国のスポーツ推進計画と青森市スポーツ推進計画は、リンクしていないのではないかと考えている。

1つの参考事例として、北海道下川町は、人口4,000人未満の町であるが、スキー競技に力を入れており、小中高一貫してスポーツ少年団を組織している。東京や長野からもわざわざ参加する子もいるようで町のホームページに記載してあった。先のオリンピックで活躍したジャンプの葛西紀明選手、原田雅彦選手、高梨沙羅選手等を育てた地域でもある。オリンピック選手を輩出するなど底上げがうまくいっているように思われる。青森市ももっとうまくやればカーリングの街も盛上げることができるのではないか。例えば、先程柴田委員がおっしゃったように、スポーツをやる子とやらない子が2極化しているということであれば、やらない子に対して小さいうちからスポーツをやらせる機会を提供する仕組みを考える必要があるのではないか。学校だけでなく、地域と連携できる具体的な支援策を考えていくべき。

また、文芸春秋に掲載されていたが、今年93歳になる熊本出身の守田満さんという方は、町内会の運動会で選手が足りなかったことから、69歳の時に参加し、若い方に混じって2位の成績を収め、それから、陸上競技を始めた。また、マスターズ世界陸上では、90歳から95歳の部で100mと200mの世界記録も保持している。小学生には、おばちゃんではなく守田さんと呼ばれており、そのことが嬉しいと励みになっている。これも地域と学校活動の連携の一例ともいえる。

国では、スポーツ庁の設置に向けて各省庁の調整が進められているが、スポーツ基本法の新たな理念として、「健康増進」は厚労省、「スポーツマネージメント」は経産省、「運動公園等の施設」は国交省の所管となっている。青森市では、教育委員会が担っているが、スポーツ基本法に基づきスポーツを推進するためには、市全体で取り組むことを考えてもらいたい。

Q 青森市スポーツ推進計画は、国の計画とリンクしているのか？

A (事務局): 地方に期待されている施策等は盛り込まれているものと認識している。

【本多委員】

冬季オリンピックでは、昔はカーリングがマイナーだったが、今は違うのと同じように、私たちの世代にはマイナーと思われるハーフパイプなどがメダル獲得によりメジャーになってきている。そのことから、青森市を振り返ったとき、雪のある地域は限られているので、今後冬の雪を生かした競技をどんどん増やして行って、全国大会等を行っていけばよいと思う。ハーフパイプ競技は若い選手が多いようなので、どんどん青森に来ていただいて、観光資源をPRしていただくことにより、経済効果を生みお金を落

としてもらう。雪を活かして青森の活性化を図ってはどうか。という内容の提案で応募させていただいた。

今後、人口はどんどん減っていく。青森県は、平成 22 年度で 137 万人が平成 52 年には、93 万 2 千人になる。青森市は 29 万 9 千人が、20 万人になる見通しのため、先を見通して、長いスパンでの計画の対応を皆さんでしていきたい。

【三浦委員】

青森市スポーツ推進計画については、広報あおもりで見ていた。

今後の 20 年の間に、これまでの 20 年のターゲットが変わってくるのではないかと。ターゲットをどうすればいいのか。ライフステージに応じてやっているのか。行政としてどういったスポーツ事業を重点的に支援できるものなのか。将来を見据えて今何をするのかを整理する必要がある。

もう少しインパクトのある活動がないかと調べたところ、例えば鹿児島では、「使えば無くなるお金の貯金、使って貯めよう筋肉貯金」という方針を掲げているところがある。これからのターゲットは高齢者。また、エコスポーツ。青森は、海・山・川が近くにあり雪もあるので、ウインタースポーツにこだわったものだけというのではいかがなものか。

Q スポーツ推進計画に「スポーツ・(中ポツ)レクリエーション」としているが、なぜ中ポツにしているのか？

A 運動という意味ではレクリエーションも大事な要素であり、これまで市としてレクリエーションも重視しているところであり、そういった継続性から中ポツとした。

Q 取り組みの成果と問題点をどう捉えているのか？

A 毎年、事務事業点検を行っている。次期計画の策定の際、委員の皆様のご意見をいただきながらフォローアップ作業をしていく中で、成果と問題点を整理し、その課題解決策を検討していくことになる。

Q インパクトのあるものを考える必要があると考えるが？

A スポーツを取り巻く環境も時代とともにスポーツ振興方策も変化していくものと考えことから、今後、委員の皆様のご意見をいただきながら検討していくものと考え。

【村上委員】

Q 愛好会やクラブは、あまり知られていないように思う。周知が大事で、組織をもっと PR する必要があるのではないかと。

市では、どのようにして愛好会やクラブ等の活動を PR していくのか。図書館とかの施設にもパンフレットなどを置いたらどうか。

A スポレクニュースというものを 2 ヶ月に 1 回発行している。プロバスケットボールリーグに参加している青森ワッツの情報や市民意識調査でも注目が多かったウォーキングなども載せているが、クラブ等も載せていきたい。

Q 推進計画も今初めて知った。推進委員と審議会委員の連携が大事であると考えますが、事務局はどのように考えているのか。

A 当審議会委員としてスポーツ推進委員協議会理事長の奥委員も参加している。スポーツ推進委員の派遣についても去年から行っており、この審議会の内容についてもスポーツ推進委員に関連する内容については情報提供していく。

【和嶋委員】

総合型地域スポーツクラブについて、全国には3,400あり青森市には、3つある。Willは、施設型スポーツクラブで、6種目600人くらいが加入している。うちスイミングが450人で多い。スタッフは、職員とガイドの人が指導にあたっているが、退職すると種目自体中止になる問題がある。

これから総合型地域スポーツクラブが発展するためには、町内会、地域スポーツ少年団の連携が必要である。スポーツ少年団は、学校型のクラブが多く、多種目でもあるので、総合型になる。スポーツ少年団を核にする取り組みが方法として考えられる。また、社会体育として、指導者は、外から地域の情熱のある人を取り入れる。

また、地域に学校などの施設を開放することで地域振興に役立つのではないか。

スポーツボランティアも大会を盛り上げるうえで、力になっている。青森県では平成37年に国体を招致する動きがあり、また2020年の東京オリンピックもあるので、スポーツボランティアを組織できればいいと考えている。これらについて、皆さんで考えていければと思っている。